

後書きに代えて

黄昏時。
たそがれどき。

光と闇の狭間の時刻。

夕陽が街を茜色に染め上げ、あらゆるものに黄金色の輝きが宿る。

そんな、一日の中でもっとも詩心が揺さぶられる黄金の時の中を、紺野千鶴は歩いていた。

商店街と並行して走る裏通りを、ゆったりとした足取りで。

下校途中の彼女にしては珍しく、その頭の上には学校指定のベレー帽が載っている。手に提げているこれまた学校指定の黒い革鞆が、教科書やらノートやらでぱんぱんに膨れあがっていることから察するに、ベレーを押し込むだけの隙間が無かったのだろう。

その凶悪なまでに重く感じられる革鞆を持ちかえようと、千鶴が立ち止まったそのとき。

「ん？」

視界の中を何か白いものがよぎった。

そんな気がして、千鶴は、ふっと空をふり仰いだ。

「何かしら？」

目をこらすと、澄みきった紫色の天蓋から紙片が一枚、ひらひらと舞い落ちてくる。

風に煽られ、まるで千鶴めがけて飛んでくるかのようだ。

「まさかね」

だが。

白い紙切れは、過たず千鶴めがけて落ちてくる。

「えっ、うそ？」

千鶴が呟いた、その一瞬後。

思わず差しだしたその掌の中に、それはふわりと収まった。

「うーん、出来すぎ」

千鶴は、作為さえ感じられるほどの偶然に感嘆の声を上げつつ、和紙のような風合いの箋をながめやった。

何やら文字が書いてある。

「なになに……」

千鶴は、手紙らしきものの文面を声に出して読み上げた。

「拙者、後書きを書くのは大の苦手ゆえ、貴辺らにお任せ申す。不知火」

しばし、固まる千鶴。

「……何これ？」

と、そのときだった。

「ちいちゃん、待ってよお」

声は、千鶴の背後、かなり遠くのほうから聞こえてきた。

千鶴は不思議な雁の文を制服のポケットにしまいこみ、ふり向いた。

声の主はもちろん、かりんである。

息を切らせて駆けてくるかりんに、千鶴がきよとんとした顔を向ける。

「あれ、かりんちゃん、先に帰ったんじゃないの？」

「……う、うん」

なんとか、千鶴のもとまでたどり着いたかりんは、呼吸を整えつつ答えた。

「……ちょ、ちょっと……いいもの、見つけたから……」

「いいもの？」

「うん」

かりんは、にこっと微笑むと、手にしていた学生鞆から小さな弁当箱を取り出した。

「これ」

黙ってかりんの行動を見守っていた千鶴が疑問の眼差しを向ける。

「それ、かりんちゃんがいつも使っているお弁当箱じゃないの？」

「そうじゃなくって……。この中に入っているもの」

言いつつ、かりんは小振りの弁当箱を振ってみせた。確かに中に何か入っているらしく、からからと小さな音がする。

「あ、なんだ。そういうこと」

「うん」

「で、なにを見つけたの？」

「えへっ」

かりんは、うれしそうに笑うと、弁当箱の蓋をぱかっと開いた。

「なにになに？」

好奇心をくすぐられ、千鶴は弁当箱の中をのぞき込もうと、顔を近づけた。

「うぐっ?!」

腐った牛乳をたっぷり吸い込んだ古雑巾が放つような、ある種独特のニオイに、千鶴は慌てて飛び退った。

「な、それって、まさか……」

手で口許を覆いつつ眉をひそめる千鶴に、かりんがにこつと笑みで応える。

「うん、銀杏だよ。まあ、このニオイが好きっていう人は、あまりいないよね」

「しまつて。早くしまつてよ、息が詰まるっ」

かりんは、くすくすと笑いながら弁当箱の蓋を閉め、鞆の中に仕舞い込んだ。

「食えると美味しいのに」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「まだまだいっぱい落ちてたから、明日ちいちゃんも拾って帰れば？」

「い、いい。遠慮しとく」

「そう？」

かりんの弁当箱が、パッキング付きの密閉がきくものだったおかげで、ニオイはすぐにおさまった。

千鶴は、ふうつと小さなため息を吐くと、歩きだした。

が、そのとき。

いかにもうれしそうに、かりんが言った。

「ちいちゃん、一句、浮かんじゃった」

千鶴は、かりんの言葉にぴたつと足を止め、ふり返った。

「ふうくん、どんな句？」

時々かりんが即興で詠む俳句をひそかな楽しみにしていた千鶴は、期待を込めて尋ねた。

「うん、じゃあ詠むね」

鞆を足下に置き、かりんは呼吸を整えた。そして、かなり明るめの声で一句を詠んだ。

銀の杏 入れて美味しい 茶碗蒸し

幾ばくかの沈黙のあと、かりんがウインクしながら言った。

「どう？ 美味しそうな一句でしょ？」

「うん、まあ……」

やや間をおき、千鶴が言葉を継いだ。

「銀の杏って、銀杏のことね。うくん、けっこう捻ったわね」

腕組みをしたまま、千鶴が率直な感想をもらした。

「えへっ」

「でも、今の句って、俳句なの？」

「季語が入ってれば、俳句だよ」

「無いのが川柳だよ。それは知ってる」

千鶴が言外に含ませた言葉の意味をくみとって、かりんは答えた。

「銀杏が秋の季語なんだけど……」

やや歯切れ悪そうに、かりんが先を続ける。

「銀の杏を季語と言っていていいかどうかは、微妙かな」

「うくん、そっかあ」

「まあ、新解釈ってことで、ひとつよろしく……みたいな。だめ？」

「ううん、そんなことないよ。素直に“銀杏を”と、しなかったところがかりんちゃんらしくて、いい一句だと思う」

「えへへ、ありがとう。ちいちゃんなら、そう言ってくれと思ったんだ」

胸の前で手を合わせ、かりんはうれしそうに微笑んだ。

「あたしも、ひさしぶりに一句捻ってみようかな」

「えっ、ほんと？」

いつもは聞き役にばかりまわっている千鶴が一句詠むと聞いて、瞳を輝かせるかりん。

千鶴は腕組みをしたまま、しばし苦吟したあと、つなるように上五を口にした。

「初雪や……」

雪など、どこにも降っていないなかったが、とりあえずかりんはうなずいた。

「うんうん」

「ややあつて。」

「初雪や……」

「……」

「うーん」

千鶴は、うなつた。

天を見上げた。

指をかんだ。

そして。

「初雪やあ、蛙かわず飛び込む、水の音」

「……」

「えーと」

かりんの反応が恐かったのか、顔を合わせないようにそつぽを向く千鶴。

「ちいちゃん、真面目にやってよ。期待してるんだから」

「う、うん、ごめん」

千鶴は、面目めんぼくないといった感じで、視線を足もとに落とした。

「が、その直後。」

「ん！」

名句が浮かんだのか、千鶴はぱつと顔を上げ、ぽんと手を打った。

「かりんが、千鶴の顔をのぞき込むようにして、尋ねる。」

「ちいちゃん、何かいい句が浮かんだ？」

「うん、これならいけるかも」

「どんな句？」

「かりんが急せかす。」

千鶴は、こほんと一つ咳せき払いしてから、口を開いた。

「初雪やあ、かわず大の字、雪の上。ばつたり……みたいな」

「ジェスチャー付きで会心の一句を詠えいじた千鶴の横で、かりんは、がくつと肩を落とし、思いつきり脱力していた。」

「ち、ちいちゃん……」

それ以上言葉もなく、ただあんぐりと大きな口を開けているかりんを無視して、千鶴がいま詠んだ句の解説をはじめめる。

「初雪が降った、凍えるような寒い冬のある日。それまで、なんとか生きながらえてきた蛙かえるども、とうとう力つき、雪の上で往生じやうじやうしてしまったそう。さだめとはいえ、なんと哀あわれなことよ。諸行無常しよぎやうむじやうとはこの事だなあ。……みたいな？」

「……………」

しばしの沈黙のあと、かりんは、はあっと深いため息をつき、言った。

「ちいちゃん、芭蕉ばしやうの句から離れて」

「わ、わかつたわよ」

少し口をとがらせ、千鶴が応じる。

「うーんと、じゃあ、あたしもかりんちゃんにならって食べ物系で攻めてみようかな」

「かえるはダメだからね」

間髪かんはつを容いれずに、かりんが釘くぎを刺す。

「わかつたつてば」

千鶴は短く答えたあと、意外にあっさり次の一句を捻ひねりだした。

初雪に 練乳かけて かき氷

「……………」

微妙な間まのあと。

千鶴が口を開いた。

「感想聞かせてよ、かりんちゃん」

「うーん、まあまあかな」

「それだけ？」

「かえるばつたりよりは、ずっといい感じ」

「かわず大の字」

千鶴が、すかさずかりんの間違まちがいをただす。

「あ、えーと、そうだっけ？」

かりんは、さりげなく、路上に置いてあった鞆に手を伸ばし、足早に歩きだした。

慌てて後を追いかける千鶴。

「ご、ごら、待ちなさい」

「さ、早く帰って茶碗蒸し作ろうつと」

まだ何か言いたそうにしている千鶴に、かりんが訊く。

「ちいちゃんも食べるでしょ？」

「え？ うん」

千鶴はそう答えたあと、はっとして言った。

「ま、まさか。学校で採れた銀杏を入れるつもりなんじゃ……」

やや歩くスピードを緩めながら、かりんが答える。

「だいじょうぶ。どこで採れたものでも、銀杏は銀杏だから」

「うーん、そうは言ってもねえ」

「じゃあ、ちいちゃんだけ、銀杏抜きのにしてあげよっか？」

「それはそれで、悲しいような寂しいような」

空を見上げて歩を進めつつ、千鶴は思案に暮れた。

と、そのとき。

「あ、そうだ」

そう言って、突然かりんが立ち止まった。

「なに？」

「椎茸と鶏肉は買い置きがあったけど、三つ葉はなかったはずだから、ちょっと

寄り道……」

「えーっ、三つ葉入れるのお？」

三つ葉の苦手な千鶴が、いかにも嫌そうな口調で不平をもらす。

「ちいちゃん、好き嫌い多すぎるよ」

「そんなこと、言ったって……」

「好き嫌いせずに、何でも食べるようにしないと、背も伸びないし、胸も大きく

ならないよ？」

「むう、言ってはならないことを言ったわね！」

「あははは」

笑いながら駆けだすかりんの後を千鶴が追う。

いつもと変わらない、平穏な日常の風景がそこにあった。

そして。

ふたりの影が、夕闇に紛れて見えなくなってしまったころ。
ふわり。

空からふたたび紙片が舞い落ちてきた。

羽毛のように軽くゆるやかに。

ゆっくりと、ゆっくりと地上へと近づいてくる。

ふわり、ゆらゆら。

ふわり、ゆらゆら、と。

やがて。

和紙の箋は、その滞空の時を終えた。

だが、アスファルトの冷たい地面に落ちると思われた、その瞬間。
やわらかな光に呑み込まれるように、それはふっと掻き消えた。

誰の目にも留まらなかった不思議な雁の文には、こうあった。

またいつか、お会いできる日を夢見て。

不知火 紫苑